

壁 面 構 成

「壁を彩る～春夏秋冬～」

部屋 美咲・眞鍋 けい・米良 友里
脇 千加

〈はじめに〉

壁面構成とは、保育室などを装飾することをいい、絵を描いたり、工作を行うことである。幼稚園教育要領の領域「環境」のねらいは「身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりそれを生活に取り入れようとする。」「身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で物の性質や数量、文字などに対する間隔を豊かにする。」とされている。子どもにとって保育室はとても大切な生活の場であり、自宅同様に身近な生活環境であると言える。そうしたことから、保育室の壁面は子どもの興味・関心をひくことが重要であると考えられる。

子どもの成長・発達を理解したうえで、壁面に取り入れる題材を変えていくことが、子どもの発達の刺激となる。壁面構成に季節を取り入れることは、季節や行事に対する関心を高め、その時々の子どもの興味関心にあったデザインは、そこから様々なイメージを膨らませることができる。このことは視覚的な支援となり、色彩感覚や感性が豊かになる役割もある。

また、壁面構成は、子どもがいきいきと生活し、毎日が楽しくなる保育室の環境構成の一つでもある。壁面の装飾の中での個人の顔写真や作品の配置によっては、一人ひとりの幼児が大切にされていることを実感させるような教師の意図を強く表すものもある。

壁面に教育的な情報を取り入れ、立体感や、遠近法、さまざまな技法などの工夫をし、幼児

が生活・遊びの中で自然にそれらと親しむことができるように壁面構成をすることが大切である。一見、保育室を明るく楽しい雰囲気になっている壁面装飾には、教師の教育的意図が強く表されているのである。

私たちはこういった壁面構成の意義を理解しながら1年を通して実際に制作し、バーチャル保育室に展示した。以下はその制作記録である。

〈5月「こいのぼり親子」〉

5月の行事はみどりの日、八十八夜、憲法記念日、母の日、端午の節句などがある。中でも子どもにとって身近である母の日と端午の節句を取り上げた。

まず、5月の第二日曜日にある母の日とは、母親に対して日頃の苦労を労い、感謝を表す日である。世界中に日にちは違っても母の日はあり、日本ではカーネーションを贈る習慣がある。次に5月5日にある端午の節句は、「菖蒲の節句」とも言い、古くから邪気を除くために菖蒲を軒にさしたり、ちまき、柏餅を食べる習わしがある。男児のいる家では鯉のぼりを立て、五月人形を飾って出世を祝う。鯉のぼりは江戸中期に町屋で行なわれ、「黄河の急流の竜門を登った鯉は竜となる」といわれる鯉に立身出世を願って大空を泳ぐようになった。それぞれの行事には、親から子どもへの思いや願い、親への日頃の感謝の気持ちなど多くの思いが込められていることを知った。それぞれのシンボルでもある“こいのぼり”と“カーネーション”を題

材に思いを込めて作品を制作した。

四つ切の画用紙を6枚繋ぎあわせ、スズランテープを貼り白い花がみのふわふわした雲と青空を作った。青空を泳いでいるお父さん・お母さん・子どもの親子の鯉のぼりはそれぞれ違う技法で個性的なウロコにした。まず、青色のお父さん鯉のぼりは、障子紙にみんなの手形をとったうろこにした。赤色のお母さん鯉のぼりは、マーブリングのウロコを、黄色の子どもの鯉のぼりにはドリッピングとにじみ絵のウロコにした。それぞれ、お父さんらしさやお母さんらしさを出すために目を工夫した。

青空を泳ぐこいのぼりの下に咲いているのはカーネーション畑だ。カーネーションとカーネーションの葉っぱは花がみで作った。カーネーションの特徴である花びらの先をギザギザにしたり、赤い花びらの間に白色の花紙を挟み、個性豊かなカーネーションに思いを込めて花畑を作った。

はじめての作品ということもあり、時間もたくさんかかり、試行錯誤を繰り返しながら作り出した。保育雑誌を参考に、お互いのアイデアを出し合うことでより素敵なものを作った。また、立体感を大切にしていたが、何を主に伝えたいのかがわかりにくかったのではないかとこの反省点を見出すことができた。



〈6月「かえるの合唱」〉

6月は梅雨の季節だ。梅雨の季節にはカエルの鳴き声が響き渡っているのをよく耳にする。ジメジメした雰囲気を吹き飛ばしてくれる楽し

いカエルが合唱している様子や6月の季節の花である紫陽花を壁面構成に表した。

池は、水色の画用紙にするのではなくマットの滑り止めのあみあみや、ダンボールの断面や、でん粉のりのふたや、型抜ききの魚の型などを、白い画用紙に青色の絵の具でスタンプした。そのことにより、池の水に雨粒が落ちてキラキラ光る澄んだ池を表すことができた。その上で歌う4匹のカエルと、大きな音符とともに泳ぐオタマジャクシはそれぞれ歌う表情が違い、楽しく歌う様子を表した。上から降ってくる雨粒は、廃材利用として梱包用のプチプチを利用した。裁縫用の糸に雫の形の青色や紫、黄色で塗ったプチプチを貼り付けて、壁面の裏に糸の先を貼り付けて、風が吹くとゆらゆら揺れるようにした。大きな紫陽花は、花と葉っぱを折り紙で作った。花は紫やピンク、青色など様々な色の小さな花をたくさん作って大きな紫陽花を作った。紫でも、濃い紫や淡い紫など、様々な色を合わせることで柔らかく優しい雰囲気のカエルができた。

2回目の壁面制作ということで手際よく、みんなのアイデアを形にすることができた。この壁面は遠くから見ても楽しむことはもちろん、近くで見ても池のスタンプの形を楽しめたり、風に揺れて雨粒が揺れる様子を楽しめたり、いろいろ楽しむことのできる壁面になった。



〈7月「七夕」〉

私たちは、7月は七夕の夜空を制作した。

七夕は、7月7日に行う星祭である。七夕の日は、一年に一度だけ「おりひめ」と「ひこぼし」が天の川に架かる橋を渡り、出会うことができる日だと言われ、この日に願い事を書いた短冊を笹の葉につるし、飾っておくと願いがかなうと言われている。

7月の壁面構成では、夜空に広がる天の川をイメージし制作を行った。

背景は、黒の画用紙を使用し、夜空に広がる天の川、星が引き立つように色を考えた。

天の川では、黄色・薄い黄色・青・水色・紫の折り紙を手でちぎり、色を混ぜ合わせながら川の流れを描き、のりで貼りつけていった。ちぎった折り紙に一枚ずつのりをつけ、貼り重ね、川が流れている様子を表現できるよう色合いを確かめながら貼りつける。折り紙を重ねて貼ることにより、膨らみがでて川の流れを表現することができる。また、綿を折り紙の上から少しづつちぎって貼ることにより、流れの柔らかさを出すことができた。

天の川に架かる橋では、おりひめとひこぼしが橋を渡り出会う様子を表現するため、立体的に制作を行った。画用紙にカッターで切り込みを入れ、橋の裏に針金を二本つけ、丸みをつけて貼ることにより橋が天の川に架かっている様子を表現することができた。

おりひめとひこぼしは、画用紙で作った。一年に一度出会えた喜びが伝わってくる表情で、見る人に幸せが伝わるような表情にした。

竹は、黄緑・深緑の画用紙を使用し丸めて筒状にすることで、竹のすくすく伸びた様子を表現した。一色で作るより、竹の色合いが表現できるよう工夫を行った。

笹の葉に飾っている短冊は、ピンク・黄色・青・緑の画用紙、折り紙を長方形に切り、比治山大学の先生や学生、またオープンキャンパスに参加してくれた高校生、保護者の方に協力していただいて、願い事を書いてもらった。みんなの幸せを願うとても素敵な短冊となった。

夜空に散りばめた金・銀の星は、折り紙で作った。きらきら輝く星が、年に一度の七夕の日を輝かせてくれている。



〈10月「秋のピクニック」〉

10月は動物たちが汽車に乗って秋の紅葉した木々のきれいな森をぬけ、楽しくピクニックに行く様子を表現した。

ピクニックに行く動物は、りす・くま・うさぎ・ひよこといった、子どもたちにとってなじみ深い動物を選んだ。みんなそれぞれりんご・かき・洋なしの秋のくだもの汽車に乗って出発。見上げたときに見える木には赤・黄色・オレンジのお花紙をちぎって貼り、紅葉した葉っぱをイメージしてちりばめた。

線路は廃材利用としてダンボールと毛糸を利用し、線路の道の音が聞こえてきそうなように、均一に配置するのではなく、隙間の間隔をバラバラにして配置した。背景は白色の画用紙を使用することで、晴れた空をイメージし、木々の色合いが目立つようにした。



動物たちを平面に貼り、動物たちが乗っているくだもの列車をダンボールに画用紙を貼ることにより立体的になり動物たちが乗っている様子を表現した。また、動物たちが楽しそうに見えるように目の大きさや口の形にこだわって表情を作り、淡い色の画用紙を使用することで秋のほんわかした優しい感じがでるようにした。シンプルだが、秋の魅力がたくさん詰まっていて、ピクニックに行きたくなるような見ていて楽しい作品になった。

〈12月「サンタが街にやってきた」〉

12月の壁面は、クリスマス为主题に、大きなクリスマスツリー・ソリに乗ったサンタさん・プレゼントを待っている子どもたちの家を制作した。

大きなクリスマスツリーは、緑色を主とした様々な色や紙を使い、クリスマスを楽しみにしている街の様子が伝わるように大きくカラフルに作った。そして本物のクリスマスツリーのように星やステッキなどを飾り付けた。スタンプングをした丘の上に建っているお家は、遠近法を使い、小さく作ることでサンタさんがこれからプレゼントを配りに来るのかな、という期待が持てるように作った。空から降っている雪の結晶はサンタさんがやって来た素敵なホワイトクリスマスを演出した。

取り入れた技法：ちぎり絵・スタンプング・切り絵など。

遠近法を使うことにより、立体的に制作を行



わなくても、立体感を感じることでできる壁面を制作することができた。

〈個人の感想〉

壁面を作ってみて、月ごとにどんな行事やデザインにするか考えたり、なるべく平面ではなく立体的になるように段ボールで画用紙を浮かせたり、綿を貼ったり、折り紙を折って貼ったり、いろんな素材を使って見て触って楽しい壁面ができたと思う。壁面を作る中でスタンプングやボディペインティングなどをして作る過程も楽しむことができた。

図案は保育雑誌から取り入れながら図案担当の人を中心に自分たちで考えていった。作っているうちにどんどんアイデアが出てきて、凝りだすとひとつの作品を作るのに2時間分の授業を使っていた。また、動物や人物を作ったときに顔の表情のパーツの位置や大きさで表情が変わるのでおもしろかった。出来上がったあとにはいつもバーチャル保育室に飾りに行き、月ごとに壁面が変わっていくのを見るのも楽しくて毎回、壁面を作ることがとても楽しみだった。

難しかったところは図案をみて動物や人物の形に切ったり、大きさを考えながら切ったことである。うまく左右対称に切ることができず、なかなか納得のいく形にならなかった。また、立体を主に取り入れたため背景の画用紙にパーツを取り付けるのに時間がかかったり、くっつけるためののりやボンドをたくさん使用し背景の画用紙がへろへろになってしまうこともあった。

最初に作った壁面はデザインがまださみしい感じもして立体のみを重視しているが、のちに作っていく壁面はデザインも豊かで使っている材料もいろいろなものがあり、さまざまな技法も取り入れて作っていて作品の変化もみられる。それに伴い、だんだんとよりよい作品になっていったと思う。

わ・あいの当日は壁面が立体を取り入れているため、重くてなかなか壁に掲示することができなかった。しかし、先生方やまわりにいた学生みんながどうやったら掲示できるか、一緒

に考えてくださったり、外れてしまったら直してくれたり、作品を大事に扱ってくれて大変なこともあったけど作って良かったと思った。なにより当日、来てくださった方々や子どもたちが作品を見て「これすごいねえ。」「わあ、かわいいね。」と言ってくくださる姿をみることができ、嬉しく誇りに思った。

壁面構成は保育現場に出ても必要になってくるものなので、ゼミでこれだけのものを作ることができ、良い経験になった。これからもありきたりなものではなく、ほかの先生とは一味違った自分だけのオリジナル作品を作っていきたいと思う。そして子どもたちにもしっかり楽しんでもらいたい。(部屋 美咲)

はじめに、私は子どもたちが保育室の中でも視覚から色々な季節や行事を感じることでできるような壁面を制作したいと思い、このテーマを選んだ。

制作を始めた初期のころは、どのように構成するかで悩み、制作までの時間、制作を始めてからの時間もかかったが、回数を重ねるごとに要領もよくなり、作りながらお互いがどんどんアイデアを出し合い、オリジナルな壁面を制作することができるようになった。幼児教育向けの雑誌を参考にしたり、季節に特有の行事にまつわることなど、その月に何を表現したいか迷うこともあったが、視覚を通して季節を感じることでできる壁面を制作することができたように感じる。

制作を行ってみると、季節ごとに多くの行事があることに気づいたり、さまざまな技法や素材を知ることができ、授業で習った技法やさまざまな素材を組み合わせることで立体感や遠近感などを表現することができたように思う。また、画用紙だけでなく、花紙、折り紙、スズランテープ、段ボールなど、さまざまな素材を使うことで立体的に作ることができ、見るだけで季節や行事を楽しく感じることができるようになったと思った。

最後に、このゼミの活動を通して、自分たちが満足する壁面ではなく、他の人が見て楽しく

なるような壁面を作ることの大切さを学ぶことができた。一目見て季節や行事を感じるができる分かりやすさや、目に入るインパクトなど、視覚から得られる情報を工夫することの大切さを実感した。春から保育者として社会にでたとき、学生時代に頑張ったことや、一緒にがんばった仲間を思い出し、新生活を充実したものにしていきたい。(眞鍋 けい)

壁面を制作する中でたくさんのことを学ぶことができた。5枚の壁面構成を作る中で、初めはどのようなものを作りたいかのイメージがそれぞれバラバラで、雑誌を見て話し合いをしてたくさん試しながら形にしていった。

5月の壁面では、たくさんの技法を使ってウロコを作ってみたいということで、授業で習った技法を中心に行った。手形のウロコでも、初めから障子紙に手形をしたのではなく、新聞紙や、違う素材の紙にたくさん試してみてもどのようにしたら綺麗な手形がとれるか、面白い個性的な色はどれかなど、たくさん作った中から抜粋して作った。同じ手法であっても、素材や色が違うだけでも雰囲気が違い、どれも面白いものができた。

5月は初めてということもあり、とにかく立体的なものがいいと思い、立体的にできるところは立体的にした。しかし、立体的にすることにこだわり、何を伝えたかったのかがわかりにくくなった。どのようなことを伝えたいか、どのような思いで作っているかによって、どこを立体的にしていくかどのような構成にするかなどが変わっていくことを感じた。

また、立体的にするだけでなく6月の壁面のように吊るして風が吹いたら揺れるような工夫の仕方を知った。ひとつの楽しみ方だけでなく、風が吹いたときや、お日様の光が当たった時などの見え方など、生活していく中での楽しみ方がたくさんあることを感じた。ただ楽しく作るだけではなく、制作していくたびにそれぞれが考えてアイデアを持ち寄り、思いを込めて形にしていき、反省を次へ生かしていくことができた。

7月からは、保育雑誌を見る前からどのような壁面構成にしたいかのイメージがそれぞれあり、そのイメージを広げる参考として保育雑誌を見るようになった。色や素材などこだわる部分も多く、以前よりイメージしていた物以上のものをみんなで形にしていくことがとても楽しくなった。

10月では、木には葉っぱがどのようにしているか、観察しながら壁面を制作した。壁面を制作していく中で、私たち自身も勉強になることも多かった。12月では、最後の作品ということもあり細かいところまでこだわりを持ち、今まで使った技法も応用しながら作り上げていくことができた。

実習などもあり、5枚しか壁面を制作できなかったが、それぞれに思いを込めて作り上げることができた。イメージが形になっていく楽しさや、イメージ以上のものがみんなで協力することで出来上がっていく楽しさを感じる事ができた。これから、保育園で働く中で、子どもたちがすごしやすい環境づくりのために見ていて楽しめたり、季節を感じる事ができる壁面に思いを込めて制作していきたいと思う。そして、学んだことを生かしてこれからもたくさんの壁面構成を制作していきたい。(米良 友里)

私が壁面構成を行おうと思ったきっかけは、二つある。

一つ目は、私が幼稚園に通っているときに、毎月壁にかわいい壁面が飾ってあり、保育室に入るのがとても楽しみで、壁に動物や季節の行事が飾ってあることで、幼稚園で楽しいことがあると感じ、毎月楽しみに通っていたことがあった。

二つ目は、実習に行った際にサンタさんの壁面を作らせていただくことがあり、作った壁面を保育室に飾っていると、朝来た子どもたちが次々に「あ！サンタさんが遊びに来てる！かわ

いいね。」と壁を見て友達と話している姿を見ることがあった。毎日過ごしている保育室の壁に何か飾ってあることが、子どもたちにとってはいろいろな想像をしたり、環境が変わったことに気づいて友だちと話し合ったりする、とても大切なものであるということを感じたこと、これらがきっかけとなった。

壁面構成が保育室の環境構成にどのような役割があるのかを知っていくうちに制作したいという思いがどんどん強くなっていった。

制作を通して、私は、最初は何をどのように作っていくといいのか分からなく、保育雑誌を見よう見まねで作っていた。しかし、制作をみんなで行っていくうちに意見を出し合い、どのような壁面にすると子どもたちが楽しめるのか、わくわくしながら保育室に来てくれるのかをみんなでイメージしながら作ることで、より良い壁面を制作することができた。どの行事を子どもたちに伝えたいのかを明確にすることで、季節を感じるきっかけとなることを感じる事ができた。

制作を行う中で、素材や技法にも工夫を行った。

素材は、空を表現するときにはスズランテープを使用し、雨粒では廃材のプチプチを使用したり、紅葉の葉は花がみを使用したりした。素材を工夫することで、立体感や親しみやすい壁面となることを感じた。

技法では、にじみ絵・マーブリング・ドリッピング・スタンプング・ちぎり絵・遠近法などを使用してきた。さまざまな技法を使用することで、壁面の見え方が一枚一枚違って見えることを学ぶことができた。

これから保育に向けて、学んできたことを活かしながら、子どもたちに四季折々の季節を感じてもらえるようにしていきたい。

(脇 千加)